

た、その類型に該当することは何を意味するか。そして、幽霊能一曲中の大半を占める告白は何を意味し、それを促す僧ワキの機能は、どのように把握されるべきで、そこから、どのような意図を読み取れるのかを考察した。

僧ワキがシャーマンのような能力を有する呪術―宗教的職能者でなければ、そもそも幽霊を幻視することはできない。能舞台に幽霊が登場するための条件として、僧ワキは欠くことのできない存在であり、僧ワキの視点を介して観衆は幽霊（シテ）を幻視するといえる。

しかも、その幻視は社会的に要請されたもので、見えない鼓舞にもとづいて御霊の祓除を舞台上で繰り広げる。さらに、それは安定的になされる必要があるため、二元的構成のシャーマンとして僧ワキは造型され、さらにシャーマンの憑依に関する分類ではいえば、預言者型あるいは見者型でありながら、精霊を自在に操作する「精霊統御者」に相当することを確認した。

また、当然のことだが僧ワキは仏僧である以上、幽霊に対して仏教的な文脈から解釈を加える。幽霊は地獄（あるいは修羅道）といった仏教的世界観に対置され、自らのおこないを否定的に解釈し、懺悔（告白）し、僧ワキに引導される対象となる。そこで僧ワキは死者との直接交流をおして「懺悔を聴いてやる」存在であり、「引導を渡してやる」存在として死者に対して優位性を確保できるようにもなった。

僧ワキが登場する枠組みのなかで、死者は崇めることもなく、地獄での苦患を告白するにとどまり、仏法により引導される存在でしかない。もはや死者は畏怖の対象でなくなる。反対に、

僧ワキは罪を赦し、引導を渡す存在として、その権限を増大させる。しかも告白を現前化する劇を仕組み、それを繰り返して上演することで、仏教的な罪の意識は世の中に浸透し、何が罪なのかを観衆たちに意識させることになったのではないかと考えた。

これまで勧進興行の場で死者供養を劇に仕組むことが喜捨を促すために最も適した題材であったことは指摘されてきた。とはいえ、「告白劇」という文脈に置き換えたなら、そこから新たな幽霊能の一面が読み取れる気がしてならない。私だけだろうか。

宗教学的知見を加味した能楽研究のあり方も模索されてよいのではないだろうか。

在家仏教の顕れとしての説経節

千葉 俊一

中・近世芸能（文芸）である説経節に顕れた「仏教」とは、經典思想に源流をもちながらも、それとは異なる、それが変容し在家の生活に根付いたものである。発表者はそれを「在家仏教」と呼んだが、その呼称は適切ではなかったかもしれないと現時点では考えている。仏教の重層した変容の結果である日本仏教がさらなる変容を遂げ、生活者のいわば血肉と化したものが説経節を始め古典文芸に見出されるのである。

発表者は説経節を代表する五作品に頻出する語彙・表現を抽

出し、「悲し・哀・いたはし」及び「恋し」という二つの情念表現と、「慈悲」「供養」「無常」「因果」「往生」という五つの観念が説経節を特徴づけていることを確認した。「悲し・哀・いたはし」は仏教がその根本問題とする「苦」が横溢するこの世の現実を明示している。説経節の「苦」の中心は「恩愛」の絆の喪失である。經典思想は「苦」をもたらし煩惱である「恩愛」を滅することを説くが、説経節の物語は「恩愛」の絆の回復という結末に用意された「楽」に向かって進行してゆく。まずここに經典思想の変容が認められる。「恩（恩愛）」という觀念は、他者から受けた恵みの自覚とそれに対する返報というインドにおける原始仏教思想が、中国において儒家思想のうちに受容され報恩としての親への孝にほとんど収斂されたものである。この「恩愛」は中世日本においては、封建制度のうちに親子・夫婦という親族間、主従という疑似親族間における「献身の道徳」（和辻哲郎『日本倫理思想史』）として展開した。中国の場合と異なっているのは、ここに「恋し」という情念が強く作用し、親子・夫婦間、主従間の非対称性を感じ取りにくくされていることである。「苦」をもたらし原因を指し示すものが「無常」と「因果」のはずなのだが、經典思想のそれと違い両者とも「苦」の原因説明の機能を果たしているとは言えない。「無常」はその結末に「楽」（榮華の回復あるいは浄土往生）が実現する説経節物語世界において必ずしも決定的要因となっておらず、「因果」は古典文芸全般がそうであるように、過去世に言及しながらもそれを説明せず、不思議な運命（約束）という意味あいでは使われている。物語の主人公たちを「苦」から

「楽」へと歩むのを助ける諸要素が、「慈悲」「因果（応報）」「供養」「往生」である。大乘仏教思想としての「慈悲」はかなり直接的に説経節に反映しているようだ。主人公たちに対する善行・悪行、また彼らの神仏への信仰行為に対する報いは現在世においてすみやかに与えられる。ここには三世の因果の思想の変容がある。「供養」は今では亡き親族への献身という意味で「恩愛」の行為であり、「恋し」の情念の表明である。浄土「往生」は最終的な「楽」と言えるが、説経節では「恩愛」の成就の確認という姿を取っている。

以上の「苦」「無常」「因果」「恩（恩愛）」「慈悲」「供養」「往生」の七つの仏教思想の変容したものが説経節を特徴づけていると言えるが、これらを生活者の救済の諸相として見ると、まず「慈悲」「因果（応報）」「往生」はいわば積極的な救済の相であり、現世の現実を相対化するものである。一方、「無常」「因果」は不条理な現実を受容させる機能を持ち、いわば消極的な救済の相である。仏教が変容し生活に根付いたものの最も強い救済の相は「恩愛」である。「恩（恩愛）」は血縁（疑似血縁）関係を聖化させる觀念であり、親の恩という個別的で現世的な性格と仏法の恩という普遍的で超越的な性格の両者を併せ持つ。「供養」も同様の特徴を持ち、「恩愛」の延長線上の觀念と言える。以上「慈悲」「因果（応報）」「往生」「無常・因果」「恩愛・供養」の五つが説経節における「苦」からの救済の諸相である。こうした内容をもつ説経節が、芸能に本来備わったカタルシス機能とともに、生活者に仏教の救済として受容されたと考えてよいであろう。